

## 保育者養成大学学生の幼稚園・保育所における記憶および希望する保育者像

加藤由美

### Preschool Memories of Preschool Teacher Education Students and Images of Preschool Teachers That Students Hope to Become

Yumi KATO

#### Abstract

At the Department of Early Childhood Education, J Junior College and the Department of Child Welfare Services, K University of Health and Welfare, a questionnaire survey was administered to 90 students from 2007 to 2008 in order to examine what memories they had of preschool and what kind of preschool teacher they hoped to become after graduation. This paper discusses the educational methods applied at both departments on the basis of the obtained results.

The results of this survey should be provided to the students at both departments, thus enabling them to once again experience childhood feelings in order to consider what qualities preschool teachers ought to have.

86% (77/90) of students replied that they wanted to become preschool teachers who have a positive relationship with children. Accordingly, students should be trained with the goal of fostering a positive connection between child and teacher.

Conversely, only 22% (20/90) of students replied that they wanted to become preschool teachers who have the capacity to educate or guide children. Students should recognize the professional characteristics of preschool teachers—telling right from wrong, being in good health, and being skilled in arts and sports.

Key words : preschool teacher education, memory of preschool, image of preschool teacher

キーワード : 保育者養成教育, 幼稚園・保育所の記憶, 保育者像

2008.11.26受理

#### 緒 言

「人間が最初に他の人間と出会う場所で、親以外と長時間一緒に生活をする保育者は、子どもにとって非常に大きな影響力を及ぼす」(栗原 1997:155)と、一般に言われている。これに従えば、その保育者(保育所、幼稚園など乳幼児を保育する施設において保育士または幼稚園教諭の資格を必要とする業務を行う者をいう。)を目指して入学してきた保育者養成大学の学生も、自身の

保育所期または幼稚園期(以下、「幼・保期」という。)に保育者により大きな影響を受けていたと考えられる。そこで、学生自身の幼・保期における記憶について、保育者養成教育に資することが可能か否か検討する。

中田ほか(1987:51.54)は、保育者養成大学等に入学した学生に対する意識調査の結果、保育者に必要なこととして挙げられた項目の中で、第1位は「子どもを理解すること」、第2位は「子どもが好き」であること、第3位は「健康であること」であったと報告している。

また、山田ほか（1995：3-19）は、保育者をめざす学生が挙げた望ましいと考える保育者像は、上位から順に「子どもが好き」、「幸せを感じる心をもっている」、「明るい」、「子どもが好き」、「子どもに共感できる」という項目であったと報告している。そこで、保育者を養成するJ短期大学（以下「J短」という。）およびK大学（以下「K大」という。）の学生についても、先行研究と同様の結果が得られるのか否か確認するとともに、学生が将来に向けて思い描いている保育者像も保育者養成教育に資することが可能か否か検討する。

## 方 法

2007年10月にJ短幼児教育科（保育士資格および幼稚園教諭二種免許取得可）1年生42名、ならびに、2008年4～6月にK大社会福祉学部子ども保育福祉学科（保育士資格および幼稚園教諭一種免許取得可）1年生9名、同学科2年生18名および同学部臨床福祉学科（保育士資格取得可）3年生21名（K大計48名）、合計90名を対象に、次の質問3題を内容とするアンケート調査を行った。

質問1：「保育者になりたいか？」

（「なりたい」、「迷っている」および「なりたくない」の三択）

質問2：幼・保期の記憶（回答は自由記述）

質問3：希望する保育者像（回答は自由記述）

調査紙回収後、質問1の回答結果を集計した。

質問2の全回答について、「先生に関する記憶」、「遊び・園行事に関する記憶」および「アクシデントに関する記憶」に分類した。さらに、「先生に関する記憶」に分類した回答については、「肯定的記憶」および「否定的記憶」に分類した。

その後、保育者養成に関わる授業に使用し得ると筆者が判断したものを選択した。

質問3の全回答についても、「肯定的人間関係」と「教育力・指導力」に分類した。「肯定的人間関係」とは、子どもとの肯定的な人間関係に関わる内容について回答されたものとし、「笑顔」、「子どもの気持ちを理解」、「優しさ」、「信頼」、「子ども一人ひとりを尊重」、「好かれる」、「一緒に遊ぶ」、「愛情」、「担当された保育者のように」の9項目とした。「教育力・指導力」とは、付表2の回答番号(13)～(15)のように、保育者の専門性に関わる内容について回答されたものとした。

その後、質問3の回答についても、保育者養成に関わ

る授業に使用し得ると筆者が判断したものを選択した。

## 結 果

調査の対象とした男子学生27名、女子学生63名、計90名全員から回答を得た。

### 1. 「保育者になりたいか？」

質問1の回答について、表1に示した。

表1 「保育者になりたいか？」

回 答	J 短	K大	計
なりたい	27 (64)	33 (69)	60 (67)
迷っている	15 (36)	8 (17)	23 (26)
なりたくない	0 (0)	7 (15)	7 (8)
合 計	42 (100)	48 (100)	90 (100)

数字は回答者数、( ) 内は「合計」に対する割合

「なりたい」と「迷っている」の回答者数を併せると、全体の9割以上を占めた。「なりたくない」と回答した学生は、J短にはなかったが、K大には7名いた。

### 2. 幼・保期の記憶

質問2の回答について分類した件数は、表2に示した。

表2 幼・保の記憶

分 類	回 答	回答件数
先生に関する記憶 (45名回答)	肯定的記憶	26
	・(先生が) 優しかった	12
	・(先生が～してくれて) 嬉しかった	9
	・(先生を) 好きだった	5
	否定的記憶	26
	・(先生に) 怒られた	12
	・(先生が) 厳しかった	6
	・(先生が) 怖かった	6
	・(先生に～されて) 辛かった	2
遊び・園行事に関する記憶 (48名回答)	ごっこ遊び ※	13
	※以外の外遊び	9
	運動会	7
	発表会 (お遊戯会)	6
	遠足	6
	園庭での芋堀り	5
	早期教育	5
	砂または泥遊び ※	4
	プール遊びまたは水遊び ※	3

	ポディーベイント ※	2
	散歩	2
	絵本または紙芝居をみる	2
	お絵描き・工作	2
	卒園式	1
アクシデントに関する記憶 (16名回答)	けが	6
	友だちとのトラブル	4
	園から脱走	3
	病気	1
	排泄の失敗	1

全90名で、複数回答可

先生に関する「肯定的記憶」と「否定的記憶」の回答件数は、ともに26件であった。回答件数が最も多かったのは、前者が「優しかった」、後者が「怒られた」であったが、いずれも全回答者数の1/8程度であった。また、給食などの食事に関する回答は、全て先生に関する「否定的記憶」であった。

「遊び・園行事に関する記憶」は、ごっこ遊びが回答件数の第1位であったが、これも全回答者数の1/7程度であった。その中で、「セーラームーンごっこ」と回答した者は5名いた。

「アクシデントに関する記憶」については、回答者数が16名と全回答者数の1/6程度であった。

保育者養成に関わる授業に使用し得ると筆者が判断した質問2の回答は、原文のまま、付表1に示した。

### 3. 希望する保育者像

質問3の回答について分類した件数は、表3に示した。

表3 希望する保育者像

回答\項目	全体	大学	
		J短	K大
肯定的人間関係	72(80)	30(71)	42(88)
・笑顔：①	26(29)	12(29)	14(29)
・子どもの気持ちを理解：②	24(27)	8(19)	16(33)
・優しさ：③	22(24)	6(14)	16(33)
・信頼：④	17(19)	7(17)	10(21)
・子ども一人ひとりを尊重：⑤	16(18)	4(10)	12(25)
・好かれる：⑥	14(16)	6(14)	8(17)
・一緒に遊ぶ：⑦	8( 9)	3( 7)	5(10)
・愛情：⑧	8( 9)	0( 0)	8(17)
・担当された保育者のように：⑨	7( 8)	5(12)	2( 4)
教育力・指導力：⑩	20(22)	2( 5)	18(38)
無回答	5( 6)	4(10)	1( 2)

数字は回答者数、( )内は各項目の全数に対する割合。丸番号は分類番号。J短42名、K大48名、全90名で、複数回答可。

「肯定的人間関係」を回答した学生は、全体の80% (72/90) であり、そのうち上位3位は、順に「笑顔」、「子どもの気持ちを理解」、「優しさ」であった。「教育力・指導力」を回答した学生は、全体の22% (20/90) に過ぎなかった。K大については約3割を占め、その半数近くが「よいこと悪いことが教えられる」と回答していたが、J短にはその回答がなかった。

保育者養成に関わる授業に使用し得ると筆者が判断した質問3の回答は、原文のまま、付表2に示した。表中の(22)～(24)を記述した各学生は、質問1において保育者に「なりたい」と回答していた。

## 考 察

### 1. 「保育者になりたいか？」

表1において、保育者に「なりたい」学生となることを「迷っている」学生を合わせるとJ短もK大も多数を占めるが、「迷っている」学生に対しては、J短やK大において、それぞれの学生の事情に配慮した指導が必要であると考えられる。

「なりたくない」がみられたK大では、保育士や幼稚園教諭以外の資格も取得することができ、これが「なりたくない」原因の一つである可能性がある。

### 2. 幼・保期の記憶

**表2について** 幼・保期の記憶を尋ねた質問2の回答形式が自由記述であったため、最も印象に残ったことが回答されたと考えている。表2における回答件数は、回答者総数を考慮すると特定の回答への偏りが際立っていないと考えられる。すなわち、最も印象に残る体験は、子どもにより様々であることが示唆される。

なお、先生に関する「否定的記憶」は、調査前に予想していた以上に多かった。

**付表1について** 先生に関する「肯定的記憶」である回答番号(1)および(2)は、保育者による優しかったまたは嬉しかった対応が、特定の個人を記憶させるほど好印象を残させた。

逆に、「否定的記憶」である(3)は、保育者による厳しい対応が、特定の個人を記憶させた。

(4)および(5)の食事指導は、保育者が食べることを無理強いするような働きかけを行った場合、子どもは逆に食べる意欲を失い、否定的な感情を抱くおそれが強いこ

とが推察された。

(6)からは、マリア様をやりたいという自分の希望が尊重されず、納得できないままに何かをさせられたという不本意な思いが伝わってくる。保育者は、個々の子どもが納得して取り組めるように配慮する必要があることが分かる。

(8)のような記述をした学生が複数名いたことから、当時流行していたアニメの影響を強く受けていたことが伺われる。「遊び・園行事に関する記憶」である「ごっこ遊び」は、現実世界を離れて、象徴的な世界のなかで夢を実現していくという意味がある(大場ほか 1995: 60)。子どもにとって楽しく満たされた象徴的な世界を理解することも、子どもの心に近づく一つの方法になると思われる。

一方、(9)のように、日常の保育で行われる「散歩」について回答した学生がいたことは意外であった。楽しい行事や遊びではなくても、保育者に特別の配慮をしてもらえたという体験が、子どもの心に印象的な記憶として残ったのだと思われる。

(10)~(12)の「アクシデントに関する記憶」では、その時の保育者らの対応について触れている記述はなかった。多分、起こった出来事自体だけが、あるいは辛さ、痛さ等の感情だけが、強烈に印象づけられたためではないかと推測される。

### 3. 希望する保育者像

**表3について** 表3に示されるように、「笑顔」との回答が最も多かったのは予想通りであった。保育の世界に限らず世間一般において、笑顔は人間関係に欠かせないものと思われるが、学生もこの意味をよく理解していると考えられる。

また、「子どもの気持ちを理解すること」が表3の回答の上位に挙げられていたのは、緒言において言及した中田ほか(1987: 51.54)および山田ほか(1995: 3-19)の調査結果と同様であった。

「優しさ」との回答も多かったが、質問1の先生に関する「肯定的記憶」においても、「優しかった」との回答が最も多かった。多くの学生が保育者にとって大切だと考えている「優しさ」を、子どもも保育者に望んでいるということが分かる。

以上の点は、保育者にとっては、子どもとの人間関係を肯定的に成立させるために大切な能力である。この重要性について、K大およびJ短の学生も認識していると考えられるので、今後は、更に、保育者として肯定的な

人間関係を築く技術、すなわち、保育者の専門的な能力について、具体的方法を保育者養成教育として検討していくべきである。

一方、回答がK大では少なく、J短では皆無だった「よいこと悪いことが教えられる」は、現場の保育者が望ましいと考える保育者像の一つである(山田ほか 1995: 3-19)。これについて、保育者の「教育力・指導力」として検討させる機会を授業に設けることが必要であると思われる。

上述のように、表3の結果と異なっている保育者像に、保育現場の園長が求める保育士の資質(日吉 2005: 9-13)がある。「健康であること」、「基礎学力があり、社会人としての常識を身に付けていること」、「向上心があり、意欲的、根気があること」、「協力的で、協調性があり、人といることが楽しいと思えること」、「音楽的・芸術的センスがあり、興味をもつこと」、「気働きができること」および「運動能力があり、機敏であること」の7項目は、今回の回答に一つもなかった。このような専門職として保育者に求められる能力の必要性について、J短やK大の保育者養成教育においては、学生の認識を図り、現場で求められる職業人としての保育者の姿について学生自身が具体的に思い描くことができるように指導することが必要である。

**付表2について** 回答番号(16)からは、厳しく子どもを指導することは確かに必要な面もあるが、子どもが最も保育者に求めるのは優しさや安心感であるということがよく理解できる。

(17)では、子どもを叱る場面においては、特に、保育者の愛情が不可欠であると述べている。子どもは保育者の愛情を感じるからこそ、付表1(7)のように、たとえ厳しくされても保育者を慕う気持ちは変わらないのであろう。子どもへの愛情が保育者と子どもとの人間関係の基盤であるということを学生に再確認させたい。

(18)のような記述をした学生が複数名いる一方、(19)と記述した学生もいた。後者の場合、単に好かれればよいというのではなく、たとえその時は嫌われても、子どもの将来を見据えながらかわろうとする姿勢が伺われる。学生によって望ましいと考える保育者像に違いがあることが分かる。

担当の保育者名を記憶していたと思われる(20)~(22)の回答記述は、保育者とは人間性そのものが問われる職業であることを示している。「自らの人間性を高めていくことが、保育者に求められる第一のもの」(増田 2006: 117)であることを学生に自覚させるために、この結果を提示して、保育者の人間性が学生自身に影響を与えて

いるという意識をもたせる一方、学生自身も将来、他の多くの人格に影響を与えるということを予測させたい。

#### 4. 教材としての可能性と今後の課題

今回得られた「幼・保期の記憶」に対する回答は、表2が示すように多様であったので、保育者養成大学の学生に提示し再度思い起こさせるとすれば、より多くの記憶が想起されると推測される。また、付表1の分析を学生に示しながら想起させると、すなわち、子どもの気持ちを再体験させると、保育者として子どもの内面を尊重する方法を熟考させることは可能であると考え、この想起、すなわち再体験により、自分を担当してくれた保育者の人間性を確認させるとともに、表3および付表2の分析から、保育者像を熟考させることも十分可能であると考え、

この研究により、保育者として子どもとの肯定的な人間関係を築くことは極めて重要であることを学生の多くが認識していることが分かった。保育者養成大学として、この能力を育てる方法について検討する必要がある。

その一方、現場で求められる保育者の基本的な資質に関する認識が不十分だったため、現実の保育者像を思い描くことができる教育方法も併せて考えなければならない。

#### 引用・参考文献

- 1) 平井信義 (1986) 『保育者のために』新曜社。
- 2) 日吉佳代子・若山剛編 (2005) 『保育所実習』樹村房。9-13。
- 3) 飯田和也 (1998) 『一人ひとりを愛する保育～計画・実践、そして記録～』北大路書房。
- 4) 木村匡登・安原青兒 (2006) 「4年制大学における保育士養成教育の研究～保育所実習における『ゆらぎ』と『気づき』～」九州保健福祉大学研究紀要第7号。
- 5) 岸井慶子 (2001) 「第7章 保育者に求められるもの」森上史朗編 (2001) 『保育原理 第2版』ミネルヴァ書房。
- 6) 栗原泰子 (1997) 「パートⅢ実際編 第1章 今後の学習課題について」亀谷純雄・栗原泰子・福島洋子ほか『幼稚園教育実習・保育実習マニュアル』(1997) 現代保育選書9. 文化書房博文社。155。
- 7) 増田まゆみ (2006) 「子どもの生活を支える援助者として」網野武博・無藤隆・増田まゆみほか『これからの保育者にもとめられること』ひかりのくに。117。
- 8) 文部科学省・厚生労働省 (2008) 『幼稚園教育要領・保育所保育指針<原本>』チャイルド本社。
- 9) 本吉圓子 (1985) 『発達理解と保育の方法』教育出版。
- 10) 中田カヨ子・安部明子・永井千恵子ほか (1987) 「保育職に対する学生の意識の変化」日本保育学会。保育学年報。51.54。
- 11) 小田豊・森真理・湯川秀樹編著 (2002) 『幼稚園・保育所実習』光生館。
- 12) 大場幸夫・前原寛 (1995) 『保育心理学。～子どもと発達～』新現代幼児教育シリーズ。60。
- 13) 大橋喜美子編著 (2003) 『はじめての保育・教育実習』朱鷺書房。
- 14) 佐伯一弥・細田成子・北川公美子ほか (2003) 『保育学入門』建帛社。
- 15) 志賀智江 (2001) 「第1章 教育実習の理解」田中東亜子・志賀智江・松村和子(2001) 『幼稚園教育実習』日本文化科学社。
- 16) 高田文子 (2008) 「第4章 幼稚園実習」無藤隆監修 鈴木佐喜子・師岡章編『よくわかるNew保育・教育実習テキスト』診断と治療社。
- 17) 高橋君江 (2000) 「第6章 子どもの対人関係とその障害」次良丸睦子・五十嵐一枝・加藤千佐子ほか (2000) 『子どもの発達と保育カウンセリング』金子書房。
- 18) 民秋言・河野利津子編著 (2003) 『保育原理』北大路書房。
- 19) 豊田保編 東京都立川高等保育学院生著 (1996) 『私が保育になりたい理由』萌文社。
- 20) 山田明・塩川寿平・高橋君江ほか (1995) 「児童福祉教育の展望と課題」『共栄児童福祉研究』2, 3-19。

付表1 幼・保の記憶

分 類	回答 番号	選 択 し た 回 答
先生に関する記憶	(1)	(肯定的記憶) 幼稚園の2年間は同じ担任の先生で、すごくやさしかったので大好きだった。
	(2)	幼稚園で、人と話をすることが苦手だった私に、担任の先生は笑顔であいさつしたり、よく話しかけてくれたりした事が嬉しくて、幼稚園という、まずその先生を思い出します。
	(3)	(否定的記憶) 先生が怖くて保育園に行きたくなかった。先生にお尻ばかり叩かれていた。
	(4)	給食の時間がつらかった。
	(5)	給食を食べるのが遅く、強引に食べさせられた。
	(6)	劇でマリア様の役をやりたいかったのに、勝手に先生が子どもたちの配役を決めて、ナレーターにさせられ、かなり長いセリフを覚えさせられた。
	(7)	(肯定的記憶および否定的記憶) 厳しい時は厳しかったけど、とても優しい先生で、大好きだった。
遊び・園行事に関する記憶	(8)	セーラームーンごっこばかりしてました。おままごともしよくやってました。
	(9)	朝早く幼稚園に来た人だけ、園長先生が近くの公園に散歩に連れて行ってくれた。
アクシデントに関する記憶	(10)	大嫌いな男の子に爪を立てられてひっかかれたことがつらかった。
	(11)	雨の日に友達と室内で追いかけっこをしていて、柱に頭をぶつけて血がいっぱい出た。
	(12)	遠足の日の朝、園庭で遊んでいて、遊具から落ちて傷だらけで遠足に行った。

付表2 希望する保育者像

分 類 番 号	回答 番号	選 択 し た 回 答
⑩	(13)	子どもの変化に気付き、その配慮がすぐにできる先生
⑩	(14)	専門的な知識や技術をきちんと身につけて親のサポートもできる先生
⑩	(15)	良いこと悪いことをちゃんと理解して、子どもに教えることのできる先生
③⑩	(16)	きびしくすることも叱ることも大切だけど、やっぱり優しくて安心できる存在の先生がよい
⑧	(17)	子ども達にとって第二のお父さん、お母さんのような存在の先生がよい。それはどんな時も愛情をもっているから、怒る時も愛情があれば子どもに伝わるが、愛情がなければただの怖い人になってしまう
⑥	(18)	子どもからも保護者からも好かれる先生
⑧	(19)	その時は嫌われてもいいけど、その子が大きくなった時「よかった」と思ってもらえる先生
⑨⑩	(20)	私の保育園時代に目を見て話すことを教えてくれた先生のように、とても大事だけどみんななかなかできないことを教えてあげられる先生
②⑤⑨	(21)	幼稚園の頃のS先生のような、一人ひとりに目を向けて子どもの気持ちを考えられる先生
①②⑨	(22)	あこがれはI先生。いつも笑顔でどんな時も一番親身になってくれ、1番子どもと近い目線で接してくれる先生だから
④	(23)	子どもからも保護者からも保育士からも信頼がある先生
⑦	(24)	一緒にスポーツをしながら、子どもに体を動かすことの楽しさを教えてあげられる先生

分類番号：①笑顔、②子どもの気持ちを理解、③優しさ、④信頼、⑤子ども一人ひとりを尊重、⑥好かれる、

⑦一緒に遊ぶ、⑧愛情、⑨担当された保育者のような、⑩教育力・指導力